

## デザイナーベイビー

### 「遺伝子診断と生殖医療の進歩がもたらした 新たな生命倫理上の問題点」



1953年のワトソン・クリックによるDNAの二重らせん構造の発見以来、遺伝子工学の進歩には目を見張るものがあり、1980年代後半から1990年代前半にかけて、乳がんや肺がんなどになりやすい数多くの遺伝子が発見されました。さらに国際的な「ヒトゲノム計画」の推進により2003年にはヒトの遺伝子の全塩基配列の解析が完了し、遺伝子診断によって頻度は少なくても致命的な遺伝性疾患の診断のみでなく、遺伝子と何らかの関係がある多数の病気や体質が明らかになりました。しかし、遺伝子診断によって自分が将来かかるかもしれない病気がわかることが、本当に人間の利益と幸福につながるのか、個人情報の問題、社会的な差別を生む危険性など多様な倫理問題に直面することは必至です。

一方、生殖医療については、1978年イギリスで実現した世界で初めての試験管ベイビー「ルイズ・ブラウン」の誕生をきっかけに体外受精の技術が急速に進歩し、1990年に「着床前遺伝子診断」が初めてイギリスで発表されました。この技術は体外受精により得られた受精卵の分裂初期の段階で遺伝子を調べることにより、将来起こりうる遺伝子疾患や流産の可能性を診断するもので、流産予防を目的として世界的に広く用いられ、これまで1万人以上の

赤ん坊がその診断を受けて誕生したと推計されています。

すなわち、この診断と治療により受精卵の中から特定の遺伝子異常を持たないもの(胚)を選別して女性の子宮に移植して、遺伝病を持たない赤ん坊を誕生させることが可能になったのです。

実例を挙げれば、2000年にアメリカ人のAdam Nashは、致命的な遺伝性の血液病である「Fanconi 貧血」の姉を救うために、「着床前遺伝子診断」によりデザイナーされて誕生した男児で、世界で初めての「デザイナーベイビー」と呼ばれています。彼は男という性と同時に姉と同じHLA(白血球の型)を持ち、遺伝病を持たない受精卵にデザイナーされて生まれ、姉の命を救うために必要な骨髄移植の「臍帯血ドナー」となったのです。

さらに同じ頃、イギリス人で重篤な遺伝性貧血に罹患していたCharlie Whitakerの両親も渡米して、2003年にCharlieの弟Jamie(彼も1/50の確率で同じ病気になるチャンスがあった)を誕生させ、その弟の臍帯血を用いて骨髄移植を行い見事に成功し、2011年

5月になって、救済者として生まれた弟が病気の兄の命を救う!という見出しでマスコミに大きく取り上げられました。

しかし、このような親の決定や兄弟愛に賛同し受容する人と、逆にそのような親の決定が倫理に反するもので、そのような意図的目的のために誕生させられた子供たちの意識や感情などに将来悪影響があらわれるのではないかと憂慮する人々も多数います。

世界のほとんどの国で、この方法は不妊治療への応用については許されているものの、受精卵の遺伝子操作は規制の対象となっています。しかし最近、アメリカの民間の体外受精クリニックでは顧客の7割が健康な人で、男女の産み分けのためにクリニックを訪れるそうです。しかも近い将来には性別だけでなく、容姿、知力、運動能力などと共に眼色、毛髪や肌の色など多くの形質についてもオーダーメイドが可能になるとのことです。

遺伝子診断と生殖技術の進歩は、不妊治療や医療の分野では確かに有益で希望を与える要素が多い一面、人類の生物学的多様性を喪失させ、優生学的傾向と人間の差別化を促進し、親によって決定される子供の特性は、子供から選択の自由を奪うのではないかなど、多くの倫理的問題が提議されています。

ES細胞やiPS細胞によるクローン技術の急速な発展に伴う倫理問題とあわせて、私たち人類は今こそ、人間とは何か、幸せな人生とは何かを、もう一度問い直すべきではないかと考えます。

(豊田)

# ピロリ菌感染の慢性胃炎

## —治療適応拡大—

慢性胃炎はピロリ菌の長期の感染による炎症性疾患です。除菌治療しない限りは生涯にわたって感染した状態が続き、慢性胃炎となります。それが長期にわたると胃の粘膜が薄くなり粘膜萎縮状態になります。萎縮した場所から胃がんが発生しますが、がん発症まではかなり長い時間がかかるといわれます。

ピロリ菌感染者は、日本人の半数にあたる約6000万人。高齢者ほど感染率が高く、50代以上では7〜8割といわれています。日本の胃がん患者は年間10万人で、ピロリ菌に感染している人の100人に1人と推計されています。日本人や韓国人のピロリ菌はヨーロッパの菌に比べ胃がんのリスクが高く、また、ピロリ菌感染による慢性胃炎状態の時に高塩分食を摂取し続けると胃がんになりやすいことがわかっています。



今年2月21日に、ピロリ菌感染胃炎に対する除菌療法が保険適応となりました。従来は、胃十二指腸潰瘍、胃MALTリンパ腫、特発性血小板減少性紫斑病、早期胃がん内視鏡治療後などに対象が限られており、ピロリ菌感染胃炎については自己診療で行う必要がありました。今回適応が拡大されました。これ除菌治療の対象者が一気に増えることとなります。自覚症状がなくな

りも内視鏡検査で胃炎の確定診断がなされた患者さんに除菌治療が適用されます。

ピロリ菌が胃がん発生の最大要因であることは明らかであり、2009年に日本ヘリコバクター学会が提唱した診断治療ガイドラインでも、すべてのピロリ菌感染症に対する除菌を推奨しています。今回それが日常診療で行えるようになりました。

ピロリ菌(ヘリコバクター・ピロリ)の検査法には、内視鏡検査での生検を必要とする培養法、鏡検法、迅速ウレアーゼ試験と、内視鏡を必要としない血清抗体、尿中抗体、糞便中抗原の各試験と尿素呼吸気試験があります。

ピロリ菌の除菌療法は、それほど難しいことではなく、朝夕2回、食後に3種類の薬を1週間飲み続けるだけです。一次除菌療法に失敗した場合、抗菌剤を変えた二次除菌療法が認められており、90%以上の除菌率が見込まれています。

萎縮状態になってから除菌しても、胃がんのリスクがどの程度低下するかは疑問の残るところですが、1年に1回の割合で内視鏡による検査を行なうことが大切です。日本でも若い世代ではピロリ菌保有者が激減しており、将来的には胃がんが減少に向かうことが予想されます。

(佐藤)

## 糖尿病教室 特別講演会

2月9日(土)当院の多目的ホールで糖尿病教室特別講演会「いきいき健康教室」が開催されました。今回は「糖尿病と上手におつきあい」をテーマに、運動、薬、食事についての講義がありました。

豊田理事長の挨拶の後、当院理学療法士の指導によるバランスと筋力をつける体操をみんなで行いました。片足で立ってみるとフラフラする姿も見られ、普段使っていない筋肉を実感することが出来ました。

次に大分県民の食の好みを紹介するクイズコーナーがあり、「鶏肉消費量ナンバー1は大分県!」、「やせうまのカロリーは?」など、大分県をテーマにしたクイズで楽しい時間を過ごしました。引き続き、薬の副作用や低血糖についての講義が始まると熱心にメモを取る姿が見られました。

最後に電子レンジを使用した調理教室がありました。ラップやシリコンスチーマーを利用した簡単レシピということもあり、男性参加者にも大変好評でした。



講演終了後は、栄養科手作りの野菜をたくさん使った昼食をみんなで食べました。調理教室で作ったものも試食しながら、笑い声の絶えない賑やかな昼食会となりました。

次回は6月頃の開催を予定しています。今回参加された方も、まだ参加したことがない方も、ぜひ次回の糖尿病教室特別講演会にご参加ください。スタッフ一同お待ちしております。



(臨床検査技師  
河野美弥)



## ♪~やさしい歌声~♪



3月22日(金)午後1時30分から、当院のリハビリテーション室にて声楽コンサートが開

かれました。宮城県仙台市からお越しになった尚絅学院大学表現文化学科教授で声楽家の佐藤淳一先生と、奥様で同じく声楽家の佐藤明子さん、そしてお嬢様の佐藤瑛利子さんのご家族による美しいハーモニーを聴かせていただきました。今回のコンサートは、当院の患者さんやそのご家族の方が多数参加されて会場は満席となりました。

大分にはなじみ深い滝廉太郎作曲の「花」から始まり、「この道」や「荒城の月」、そして「ふるさとの四季」と題したメドレーで「故郷」、「春の小川」など懐かしい童謡を、武藤康子さんのピアノ伴奏にのせて全9曲披露していただきました。聴いていた患者さん達も途中から楽しそう

## 声楽ファミリーコンサート

に口ずさんだり、リズムに乗って体を動かしていました。

アンコールでは、2年前の東日本大震災の被災時の様子を語られ、その時に見上げた星空に思いを馳せながら歌われた「見上げてごらん夜の星を」で締めくくられました。

当日は、まるでコンサートホールにいるような錯覚に陥るほど感動し、みんなで素敵な時間を過ごすことが出来ました。心温まる素晴らしいひとときをありがとうございました。



## 新入職員の紹介

新緑が輝く季節となりました。今年の2月～4月に入社した新入職員15名をご紹介します。



**三代 ゆみ(看護部)**  
早く業務内容を覚え、患者さん中心の看護が行えるよう努力していきたいと思っています。



**赤峯 恵理(看護部)**  
患者さんの気持が少しでも穏やかになるような看護をしていきたいと思っています。



**木津 智奈美(看護部)**  
心のもった看護を心がけ笑顔を忘れずに頑張ります。



**馬見塚 麻美(看護部)**  
1日も早く業務を覚え、よりよい看護が行えるよう頑張りたいです。



**川野 なつみ(看護部)**  
正しい技術と知識を身につけ、患者さんに心を込めて看護を行っていききたいです。



**小野 朝美(看護部)**  
患者さんに対していつも笑顔で接することが出来るよう頑張りたいと思っています。



**河野 友美(看護部)**  
早く仕事を覚えて、患者さん1人1人に笑顔で接していきたいと思っています。



**岩田 成喜(リハビリテーション科)**  
きちんと患者さんをサポートできる理学療法士になれるよう日々頑張っていきたいと思っています。



**田中 泉妃(リハビリテーション科)**  
患者中心のチーム医療の実践に向け、理学療法士として日々努力していきます。



**高原 愛(リハビリテーション科)**  
たくさんのことを吸収できるように日々向上心を持ち、何事にも挑戦していきたいです。



**山崎 珠未(リハビリテーション科)**  
1日でも早く仕事に慣れ、患者さんのために一生懸命頑張ります。



**高田 宗士(臨床工学科)**  
早く業務を覚えて臨床工学技士として一人前になれるよう頑張っていきたいと思っています。



**外巴 真人(臨床工学科)**  
早く仕事に慣れて、患者さんに信頼してもらえるよう一生懸命頑張ります。



**川野 綾香(医療事務課)**  
常に笑顔を心がけ、思いやりの気持ちを持って一生懸命頑張ります。



**矢野 貴子(医療事務課)**  
患者さんやスタッフの方々に信頼されるよう一生懸命頑張ります。



### 編集後記

今回の記念樹は、巻頭言で遺伝子診断と生殖医療について倫理上の問題点を取り上げ、今こそ“幸せな人生とは何か”を問い直すべきだと提議されています。

健康欄では「ピロリ菌感染の慢性胃炎」についての話題。高齢者はピロリ菌感染率が高いといわれていますので、どうぞこの記事をお役立てください。

また2月に開催された糖尿病教室特別講演会では、各担当者が趣向を凝らした講義を行い好評でした。3月の声楽ファミリーコンサートでは、懐かしい童謡や唱歌を中心に心安らぐ歌声を聴くことが出来ました。

この春に新入職員を迎え、自身も初心にかえり頑張っていこうと気が引き締まります。(矢野)

### 作りま専科

#### ツナ & アボガドサンド

(材料 2人分)

食パン(10枚切り) ……	4枚	△	マヨネーズ ……	大さじ1と1/2
ツナ缶 ……	1缶		レモン汁 ……	大さじ1
アボガド ……	1/2個			
バター ……	適量			

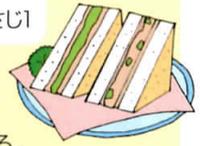
#### 作り方

- ① ツナ缶は油を切っておく。アボガドは皮と種を取り除き、1.5cm角に切る。
- ② △をボウルに混ぜ合わせ、①を加えてあえる。
- ③ 食パンはオーブントースターでこんがりと両面を焼き、片面にバターを塗る。
- ④ パン1枚に②の半量をのせ、もう1枚のパンをかぶせて3等分に切る。残りも同量にしてつくる。

#### 食パンの保存法について

食パンをすぐに食べきれない場合は冷凍保存がおすすめです。ラップでぴったりと包み、さらに冷凍用の保存袋に入れて冷凍庫へ。食べる時はラップをはずし凍ったまま温めておいたオーブントースターで焼きます。

ちなみに冷凍庫に入れるのは適していません。食パンに含まれるでんぷん質が老化しやすい温度になっているため、パサパサになり元に戻らなくなってしまいます。



### 医療法人 大分記念病院

- 基本理念**
- 1) 私達は病院各部門が一致協力して、患者中心のチーム医療を実践することにより、患者満足度と幸福に貢献します。
  - 2) 私達は常に診療レベルと看護ケアの向上を図ると共に地域住民に安全で良質の医療を提供します。
  - 3) 私達は地域の医療・福祉機関との緊密な連携を保ちながら地域完結型医療を実践します。

- 基本方針**
- 1) 専門的医療レベルと医のアートを兼ね備えた医師による全人的医療を患者の皆様へ提供します。
  - 2) 患者の皆様への立場に立って、信頼と安全の確保に全力を尽くします。
  - 3) 患者の皆様への満足度を高めるべく、心のもった医療サービスに努めます。

